平成 28 年度研修員　田中映江さんの声

プロフィール

国際協力学修士、行政学修士。大学院卒業後、国際 NGO にて緊急人道支援に従事し、主に、南スーダン人道支援・緊急支援のプログラム・事業調整を担当。ケニアより南スーダン国内避難民緊急支援の遠隔管理、エチオピアにて南スーダン難民緊急人道支援の事業調整を経験。その後、開発コンサルタントとして東アフリカ国境事業に従事。2017 年に本研修参加。

１．平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

大学院卒業後，人道支援や国境関連の業務をしていくなかで、UNHCR の現場で働いてみたいという希望や，人道支援・国際協力に従事する多様な立場のプロフェッショナルな方々にお会いして刺激を受けたいという気持ちが強くなっていました。そのためには平和構築人材育成事業に参加し、本分野のプロフェッショナルの集まる UNHCR にて経験を積みたいと考えたからです。

２．国内研修に参加した感想は？

自分が関心のある機関で働いている方々のお話を伺えたことは非常に貴重な機会でした。特に、実際の緊急人道支援における意思決定のプロセスを、国連の幹部経験者から伺うことができたり、南スーダンにおいて緊急人道支援に携わった専門家の方々の課題の捉え方を学びながら、グループで具体的なケースの分析を行ったりした経験は興味深く，一年以上たった今でも思い出します。また、講義を聞くだけではなく、個人やグループで実際に分析を行い発表する機会や、交渉のロールプレイや緊急支援における意思決定に係る疑似体験ゲームの機会もあり、常に主体的に参加できる研修でした。国内研修を通じて貴重な仲間ができ、自分が目標としたい素晴らしい講師陣に出会えたことも大きな刺激となりました。

３．海外実務研修での活動について教えてください。

海外実務研修では、Associate Field Officer(Project Coordinator)として、2016 年にカクマ（ケニア）に設置されたカロベイエイ居住区にて青年（18-35 歳）とともにコミュニティのためのボランティア活動を促進する取り組みを支援していました。カロベイエイ居住区は、カクマ難民キャンプに隣接しており、（難民キャンプとしてではなく）ホストコミュニティと難民の共存する一つの町として長期的に成長していくことを目指している居住区です。未だ職の機会は限られ教育を受ける環境も改善途上の中、「何もすることがない」状態の若者が多く見受けられます。彼らが、非行に走らずに、彼らが有する知識・スキル・才能を用いて居住区コミュニティに貢献する役割を担い、自身の人生とともに社会も向上できるよう、青年たちのサポートを行いました。

この取り組みは、Enhancing Security, Co-Existence and Refugee Protection through Refugee Outreach Volunteers と呼ばれており，ドイツ政府支援金に基づき運営されている UNHCR と UNV の共同事業です。現在 2 年次まで継続されています。

この取り組みの中で、自身がUN　Volunteerであることを生かして、ボランティアリズムの面白みややりがいなども伝えながら、グループ・ディスカッションを通じて特にボランティア意識の高い青年たちの組織化を手伝いました。また、彼らが議論を通じて主体的に実施したいと思うコミュニティ支援活動が実施されるように、さらに、カロベイエイ居住区におけるボランティアリズムの促進につながるように、議論のファシリテーションなどを含む事業運営支援を行いました。特に、本事業が終了しても持続可能なボランティアリズムが根付くようにと意識し、ボランティアリズムは、外部の支援を待つより自分が自分とコミュニティのために何ができるか考えできることから、見返りを求めず実践していくことであることを伝える努力をしました。そして、その姿勢には始まりも終わりもなく、一つの生き方であって、彼らがこれまでに多かれ少なかれ実践してきたことの延長であることを伝えてきました。

また、その他、Youth Initiative Fundという青年たちによる事業を支援するUNHCRのファンドへの申請に向けて、青年グループが事業を形成するための支援や、難民カウンセリング、難民カウンセリングのスケジューリングなどを主に担当しました。

4．海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

カロベイエイ居住区は三つの村に分かれているのですが、私はこの一年間で、そのうち二つの村の青年たちと活動をしました。一つ目の村（Village1）では、村の全地域をカバーできるように，村の複数箇所において多数のグループ・ディスカッションを実施し、特にボランティア意識の高い青年をアウトリーチ・ボランティアとして特定することにより、全地域をカバーする青年ボランティアの組織化を行いました。

そして、二つ目の村(Village 2)でも同じプロセスを繰り返すわけですが，　Village 2では、新しく組織化を行うボランティア会合にVillage1のボランティアに主体的に出席してもらい、この取り組みの意義や活動について新しく組織化されるVillage2のボランティアたちに説明してもらうようにしたところ、彼らが，私以上に分かりやすく、かつ説得力をもって生き生きと自らの具体的な経験を説明している姿を目の当たりにし、私自身がとても励まされました。彼らに約一年伝えようとしてきた種が、彼らの中で芽となり、彼ら自身のものとなっていることを再確認できた瞬間でした。

また、2018年4月に約一年担当してきた本事業の第1年次を閉めるにあたり、本事業で組織化した61名のボランティアに会いましたが、その際に、ボランティアの一名が代表して挨拶をしてくれました。そこで、「この事業を通じて、これまで注目されなかった自分たちにも、才能がある、スキルがあるということを再認識することができ、自分たちにもでき

ることがたくさんあることを気づく種をまいてくれた」という趣旨の言葉を聞き、これまで一年間私が伝えようとしたことが理解してもらえたという感動を覚えました。

５．今後のキャリア・プランを教えてください。

一年間の海外研修を終了した後、正規 UNV として契約延長となり、引き続き UNHCR カクマ事務所に勤務しています。まずは、目の前にある業務に真摯に取り組み、国際協力・人道支援に従事する日本人の一人として評価されるように努力していきます。今後も引き続き、国際協力・人道支援を通じて、誰かの人生に役に立つようにキャリアを構築していきたいと考えています。

６．事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

本事業に参加する機会を得て、国内研修にて人道支援・国際協力分野に係る知識を深めることや人的ネットワークを広げることができたと同時に、海外実務研修にて UNHCR で働くことを通じて、これまで別の組織ではあくまで事業単位でしか捉えていなかった人道支援の業務がより広い視点で見えるようになったと感じています。それまでも、難民キャンプでの業務経験がありましたが、個別の事業運営では視野の外にあったキャンプ全体の運営に係る仕組みや、各セクターの連関・事業連携、難民の個々の課題を把握するためのイノベーション導入など、キャンプ全体の動きがこれまで以上に理解できるようになりました。また、国際機関におけるスタッフの働き方や、そこにケニアの文化がどのように影響しているのかなどを観察し、これまで従事した組織と異なる点などに気づくことができ、自身の働き方について見直す機会ともなりました。国際機関で働いたからこそ得られたこれらの貴重な気づきは,今後の自身のよりよい生き方につなげていこうと考えています。これまでの職場や環境を変

え，このプログラムに飛び込むことに大きな決断が必要となる方もいらっしゃると思いますが、本事業に参加したからこそ体感できる面白みや経験が沢山あると思います。